

利用上の注意

本報告書は、平成14年6月1日現在で実施した「平成14年経済産業省企業活動基本調査」について集計したものである。

企業活動基本調査の概要及び統計表の利用上の注意は、以下のとおりである。

I. 企業活動基本調査の概要

1. 調査の目的

本調査は、我が国企業の活動の実態を明らかにし、企業に関する施策の基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査の根拠

本調査は、統計法（昭和22年法律第18号）に基づく経済産業省企業活動基本調査規則（平成4年通商産業省令第56号）によって実施される指定統計調査（指定統計第118号）である。

3. 調査の範囲

本調査は日本標準産業分類に掲げる大分類D一鉱業、F一製造業、G一電気・ガス・熱供給業・水道業（但し、中分類35熱供給業及び中分類36水道業は除く）、H一情報通信業（別表に掲げるもの）、J一卸売・小売業、K一金融・保険業のうち、小分類643クレジットカード業、割賦金融業、M一飲食店、宿泊業のうち、中分類70一般飲食店、O一教育、学習支援業（別表に掲げるもの）及びQ一サービス業（別表に掲げるもの）に属する事業所を有する企業のうち、従業者50人以上かつ資本金又は出資金3,000万円以上の会社（株式会社、有限会社、合名会社、合資会社）を対象としている。

別表

情報通信業	日本標準産業分類に掲げる中分類39一情報サービス業、中分類40一インターネット附随サービス業、中分類41一映像・音声・文字情報制作業、小分類411のうち細分類4111一映画・ビデオ制作業、細分類4112一テレビ番組制作業、小分類413一新聞業、小分類414一出版業
教育・学習支援業	日本標準産業分類に掲げる中分類77一その他の教育、学習支援業のうち、小分類774細分類7745一外国語会話教授業、細分類7747一フィットネスクラブ、細分類7749一その他の教養・技能教授業のうちカルチャー教室（総合的なもの）
サービス業	
専門サービス業	日本標準産業分類に掲げる小分類809細分類8099一他に分類されない専門サービス業のうちエンジニアリング業
その他の生活関連サービス業	小分類836一冠婚葬祭業（互助会を除く）、小分類839一他に分類されない生活関連サービスのうち細分類8393一写真現象・焼付業
娯楽業	小分類844一スポーツ施設提供業のうち細分類8443一ゴルフ場、小分類845一公園、遊園地のうち細分類8452一遊園地、細分類8453一テーマパーク
機械等修理業	小分類871一機械修理業、小分類872一電気機械器具修理業
物品賃貸業 （レンタル業を除く）	小分類881一各種物品賃貸業、小分類882一産業用機械器具賃貸業、小分類883一事務用機械器具賃貸業、小分類884一自動車賃貸業、小分類885一スポーツ・娯楽用品賃貸業、小分類888一その他の物品賃貸業
広告代理業	小分類891一広告代理業

4. 調査期日及び期間

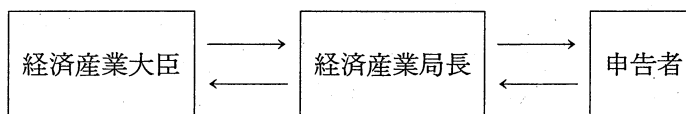
- (1) 平成14年調査の調査期日は平成14年6月1日現在である。
- (2) 調査期間は、原則として平成13年度(平成13年4月1日から平成14年3月31日まで)の一年間である。

5. 調査事項(詳細は巻末「調査票」参照。)

- (1) 企業の名称及び所在地
- (2) 資本金額又は出資金額
- (3) 企業の設立形態及び設立時期
- (4) 企業の決算月
- (5) 事業組織及び従業者数
- (6) 親会社、子会社・関連会社の状況
- (7) 資産・負債及び資本並びに投資
- (8) 事業内容
- (9) 企業間の取引及び海外取引
- (10) 事業の外注状況
- (11) 研究開発
- (12) 技術の所有及び取引状況
- (13) 情報化の状況
- (14) 企業経営の方向

6. 調査方法

調査方法は、申告者の自計申告方式により、次の調査経路に従って、郵送にて調査を実施した。



7. 調査結果の公表

本調査の集計結果は、主要項目をとりまとめ「平成14年企業活動基本調査速報」として公表したほか、確報として平成14年企業活動基本調査報告書「第1巻 総合統計表」「第2巻 事業多角化等統計表」「第3巻 子会社等統計表」として公表する。

本報告書(第3巻 子会社等統計表)は、「5. 調査事項」のうち、企業の「(6)親会社、子会社・関連会社の状況」について、集計したものである。

II. 統計表の作成及び利用上の注意

1. 企業の産業分類とその決定方法

(1) 企業の産業分類

本調査の産業分類は、事業所について適用する日本標準産業分類を適用しているが、同分類を機械的にあてはめると、事業所ベースに比べて企業ベースの方が兼業の割合が高いため、各種商品卸売業、各種商品小売業及び各種物品賃貸業に分類される企業が大幅に増大し、本調査の目的の一つである多

角化の把握などの分析にはそぐわないことになる。

このため、本調査の報告書では、この3つの産業を分類として採用せず、当該企業の主要活動によりそれぞれの産業に分類することとした。その結果、「総合商社」のような企業は、繊維品卸売業、鉱物・金属材料卸売業、一般機械器具卸売業などに分類され、「百貨店」や「スーパー」などは織物・衣服・身の回り品小売業や飲食料品小売業などに、「総合リース業」は産業用機械器具賃貸業、事務用機械器具賃貸業などに分類されている。

(2) 企業の産業の決定方法

- 1) 本調査では、企業の売上高を、企業で生産し販売する①鉱産品の販売、②製造品の販売、③製造品の加工賃収入と、他の企業から商品を仕入れて販売する④卸売・小売、飲食・宿泊の売上、⑤サービス事業収入、①～⑤以外の⑥その他の事業収入に分けて、それぞれ詳細に調べており、これらを大分類ごとに合算し、最も販売額の大きいもので大分類（鉱業、製造業、卸売・小売業、飲食店、電気・ガス業、クレジットカード業・割賦金融業、サービス業、その他産業）を決定している。
- 2) その大分類の中において、売上高の最も高い販売品目で産業（小分類）を決定した。

(3) 産業という用語の使い方

本調査の報告書における「産業」という用語の使い方は2通りあり、企業の主力業種の販売額によって産業を決め、鉱業企業、製造企業、卸売企業、小売企業、電気・ガス企業、クレジットカード業・割賦金融企業、サービス企業を比較する場合には、〇〇企業という用語を用い、それぞれの産業の内訳をみる場合には、〇〇製造業、〇〇卸売業、〇〇小売業、〇〇業という。なお、情報通信業のうち企業活動基本調査の対象業種（P 1別表参照）を総称して情報サービス・情報制作業という用語を、また、カルチャーセンター、フィットネスクラブ及び外国語会話教室を総称して個人教授所という用語を用いている。

(4) 産業分類及びその事業活動例示については、巻末の付録「企業活動基本調査業種分類表」を参照のこと。

(5) 統計表の「合計」は、鉱業、製造業、卸売・小売業、飲食店、電気・ガス業、クレジットカード業・割賦金融業、情報サービス・情報制作業、個人教授所及びサービス業（その他のサービス業を除く）の計。サービス業（その他のサービス業を除く）はエンジニアリング業、写真現像・焼付業、冠婚葬祭業（互助会を除く）、ゴルフ場、遊園地・テーマパーク、機械修理業、物品賃貸業（リース業）、広告代理業の計である。

2. 統計表及び集計項目の説明

(1) 子会社・関連会社に関する表

- ① 「子会社」とは、企業が発行済株式総数、資本金又は出資金の50%を超えて出資している会社をいう。
 - ② 「関連会社」とは、企業が出資している会社で発行済株式総数、資本金又は出資金の20%以上50%以下を出資している会社をいう。なお、複数の企業から出資を受けている場合は重複している。
- (2) 「親会社」とは、企業の発行済株式総数、資本金又は出資金の50%を超えて出資している会社をいう。
- (3) 海外の各地域に属する国については、付録の国分類表（地域を含む。）を参照のこと。
- (4) 4表、5表の集計は、次のような表章になっている。

子会社業種	保有 企業数
091 畜産食料品製造業	◎—091 畜産食料品製造業に格付けされた企業のうち、子会社を保有している企業数。
鉱業	
051 鉱業	
製造業	
091 畜産食料品製造業	—091 畜産食料品製造業に格付けされた企業が、どのような産業の子会社をもっているかを表している。業種別の保有企業数欄には、その分類に属する子会社をもつ企業数が表示されている。大分類でみた保有企業数と、小分類（3桁分類）の企業数の計は一致しない。
}	
320 その他の製造業	
卸売・小売業	
490 各種商品卸売業	
}	
609 その他の小売業	
飲食店・宿泊業	
701 一般飲食店	
711 その他の飲食店	
720 旅館・ホテル・	
その他の宿泊所	
電気・ガス業・熱供給・水道業	
331 電気業	
341 ガス業	
351 熱供給業	
360 水道業	
金融・保険業	
610 金融・保険業	
643 クレジットカード	
業・割賦金融業	
情報通信業	
370 電気通信業	
}	
419 その他の情報	
通信業	
教育・学習支援業	
761 教育	
774 個人教授所	
サービス業	
821 洗濯業	

990 持株会社	}
その他の産業	
010 農業	
690 不動産賃貸・ 管理業	

- (5) 「従業者数」は、平成13年度末の数である。
- 1) 「常時従業者」とは、有給役員、常時雇用者（正社員、準社員、アルバイト等の呼称にかかわらず、1か月を超える雇用契約者と平成13年度末又は最寄りの時点の前2か月においてそれぞれ18日以上働いた雇用者）をいう。
 - 2) 従業者規模別統計表は、常時従業者数によって区分している。
- (6) 「事業所数」は、平成13年度末の数である。
- (7) 「売上高」の区分は次のとおりである。
- 鉱産品 自社で産出し、販売した鉱産品の売上高
- 製造品 自社で生産し、販売した製造品の売上高であり、他企業に原材料、半製品、部品を支給して製造させた委託生産品の売上高及び加工賃収入額を含んでいる。
- 卸売・小売業 他企業から商品を仕入れて、加工せずにそのまま他企業又は一般消費者に販売した金額
- 飲食店・宿泊業 飲食店における売上高及び宿泊又は宿泊と食事に提供して得た収入額
- 電気・ガス・熱供給・水道事業 電気又はガスを供給する事業による収入額
- 金融・保険事業 クレジットカード事業、割賦金融事業による収入額
- 情報通信事業 情報の伝達、情報の処理、提供及び新聞業、出版業などの事業による収入額
- 教育・学習支援事業 学校教育及び学習支援、教養、技術、技能等を教授する事業による収入額
- サービス事業 サービスを提供する事業による収入額
- その他の事業 上記以外の農林水産業、建設業、運輸業・情報通信業、不動産業などの事業による収入額
- (8) 「総資産額」は平成13年度末の数値である。
- (9) 直接輸出額 自社名義で通関手続を行った輸出額。
直接輸入額 自社名義で通関手続を行った輸入額。
- (10) 「国内関係会社（子会社、関連会社及び親会社）への投融資残高」とは、国内の関係会社への出資金、関係会社の株式・社債、関係会社への長期貸付金などの合計をいう。
「海外関係会社への投融資残高」とは、海外にある関係会社への出資金、関係会社の株式・社債、関係会社への長期貸付金などの合計をいう。
- (11) 子会社・関連会社の新規保有
- 1) 「分社化によるもの」 事業の一部を分割し、別法人にしたもの。
 - 2) 「企業の買収によるもの」 他企業の株式や資産の全部ないし50%超を所有し、その企業の支配権を掌握したもの。

- 3) 「その他(1)及び2)以外)」 分割又は買収以外の理由(合併、新規事業による新設等)によって新設したもの。

3. 記号及び注記

- (1) 統計表中の記号、「-」は該当数字なし、「0」は四捨五入のため単位未満のもの。
また、「x」は1又は2の企業に関する数字であるため、個々の申告者の秘密が漏れる恐れがあるので秘匿したことを示す。なお、この秘匿によってもxが算出される恐れがあるものについては、企業数が3以上でもxで秘匿した箇所がある。
- (2) 各項目の金額・構成比の積み上げは、単位未満を四捨五入しているので合計と内訳が一致しない場合がある。また、金額は原則として百万円単位で表章している。
- (3) 平成10年調査より、一般飲食店を有する企業を調査対象とした。
平成13年調査より、電気・ガス業、クレジットカード業・割賦金融業、サービス業(I. 3. 調査の範囲の別表に掲げる業種)に属する事業所を有する企業を調査対象とした。
- (4) 平成14年調査より日本標準産業分類の第11回改訂に伴い、調査の範囲については、「I 3. 調査の範囲」に掲げる業種に属する事業所を有する企業を調査対象とした。
- (5) 「情報処理・提供サービス業」は、インターネット附随サービス業を含む。

4. この統計表に掲載された数値を他に転載する場合は、「平成14年経済産業省企業活動基本調査報告書」による旨を記載してください。

5. 問い合わせ先

この統計表についての問い合わせは、経済産業省経済産業政策局調査統計部企業統計室あてに御連絡ください。

郵便番号100-8902 東京都千代田区霞が関一丁目3番1号

電話 03-3501-1511(代表) 内線2904

03-3501-1831(直通)

資料掲載(インターネット)

<http://www.meti.go.jp/statistics/index.html>